

## 編集後記

本学会の評議員の選考基準の一つである論文評価において、本誌の掲載論文の評価点は他の邦文誌の1.5倍になった。期待したほど原著論文の投稿数の増加は見られないが、症例報告は増えているようだ。中には論文の形式になっていない論文や点数稼ぎと思われるような論文も散見される。将来の医学界を担う医師を育成する意味において責任者の更なる指導をお願いしたい。

先日、某教授がこの雑誌に投稿するとよく直してくれるので手間が省けて大変便利ですとっておられた。編集委員の皆様には学内、学会の多忙な業務の合間に毎月10数編の投稿論文で献身的な査読を行って頂き編集担当理事として心より感謝したい。

話題は変わるが、国際化、グローバル化また会員からの原著論文の投稿数を増やす為にも英文誌（国際誌）を持つことが検討されている。現在の日本国内の状況は各学会が邦文誌をもち、多数の学会が英文誌をもっているため、英文誌、邦文誌とも投稿論文数、特に原著の投稿論文数が少なく過当競争に陥り、survivalの様相も呈していると見られている。しかし将来の事を考えると本学会も邦文誌のほかに英文の official journal が必要であるということは理事、編集委員会でも一致している。これらの事を考えると現在既に発刊されていて、impact factor の高い英文誌と collaboration することも一案と考えられる。独自の英文誌を持ち、indexing、更に impact factor を上げ、原著論文も苦勞せず投稿されてくるようにするには余りにも時間と苦勞が多すぎる。

しかし、外国誌と collaboration を行うことにより、日本消化器外科学会の存在が世界的に認知されることは国際化の意味で良いことではあるが、会員にとってメリットが無ければ意味は無い。一般的に外国誌に投稿した場合、外国人の査読者が多いため彼らの評価基準で採用が決まってしまう。日本に於ける疾患の特異性、保険制度の違いによる診療の差、特にリンパ節郭清に対する評価の違いは余りにも差がありすぎる。その為、collaboration が出来た場合はこれらを十分に考慮してもらえらる査読体制を要求しなければならない。そうすれば、会員も投稿しやすくなるし、購読者も自然に増えると思われる。

しかし collaboration される雑誌の出版社や編集委員会は質と関係する査読法と購読者の増加とのかねあいを見ながら決定するだろうし、こちらもそのことを考慮し交渉する必要があると思われる。いずれにしても会員の理解なくしては国際化も、globalization も空虚なものとなる。impact factor の高い official journal を持ち、自然と質の高い原著論文が押し寄せて来るような日本消化器外科学会誌の初夢を見たいものである。

（嶋田 紘）